

町・村)共分散分析にて比較検討した。統計法に基づく申請により本データを入手し、分析にあたり東京医科大学の倫理委員会の承認を得た。

【結果】年齢調整した1日歩数は、男性は都市規模の大きい順に、7,494歩(7,330-7,659)(平均)(95%信頼区間)、7,407歩(7,287-7,527)、7,206歩(7,071-7,341)、6,911歩(6,678-7,144)、6,715歩(6,533-6,898)と有意に異なった($p<0.001$)。多重比較検定の結果、市郡番号1と4($p=0.001$)、5($p<0.001$)、2と4($p=0.002$)、5($p<0.001$)、3と5($p<0.001$)で有意差を認め、都市規模が大きいほど平均歩数が多かった。女性は、都市規模が大きい順に、6,767歩(6,643-6,892)、6,386歩(6,295-6,478)、6,062歩(5,959-6,165)、6,069歩(5,888-6,250)、6,070歩(5,931-6,208)であり($p<0.001$)、多重比較検定の結果、市郡番号1と2($p<0.001$)、3($p<0.001$)、4($p<0.001$)、5($p<0.001$)、2と3($p<0.001$)、4($p=0.022$)、5($p=0.002$)で有意差を認め、同様の結果を示した。

【考察】男女とも年齢調整後も都市規模により歩数が異なり、大きな都市の住民ほど小さな都市の住民より歩数が多い、すなわち身体活動が高い傾向を認めた。身体活動を高めるには都市の規模により、異なるアプローチ法を用いた方がよい可能性が示唆された。

P2-40.

高齢者の運動と主観的健康感—1人で実施する場合と仲間と実施する場合—JAGESプロジェクト

(大学院博士課程1年東京医科大学公衆衛生学分野)

○金森 悟

(大学：公衆衛生学)

高宮 朋子、大谷由美子、小田切優子

福島 教照、井上 茂

【目的】健康づくりにおける運動は種類、強度、頻度、時間などについて研究されてきたが、「仲間と行うか」という視点での検討は少ない。本研究は、運動を1人で実施する場合と仲間と実施する場合に着目し、主観的健康感との関連を検討した。

【方法】本研究はJAGES(Japan Gerontological Evaluation Study、日本老年学的評価研究)の一環としての横断研究である。30市町村在住の要介護認定を受けていない65歳以上の高齢者を無作為抽出

し、郵送による質問紙調査を行った。データ欠損がない21,806名を解析対象とし、男女別にロジスティック回帰分析を行った。目的変数は主観的健康感、説明変数は運動を1人で実施する頻度、仲間と実施する頻度、調整変数は年齢、等価所得、教育年数、婚姻状況、就業状況、要治療疾患、IADL、抑うつとし、全変数を同時投入した。参照群は各運動の実施頻度が年に数回以下の者とした。

【結果】主観的健康感良好のオッズ比が有意に高かったのは、男性の1人での実施で週4回以上1.68(95%信頼区間：1.46-1.95)、週2~3回1.33(1.13-1.57)、仲間との実施で週4回以上1.35(1.06-1.72)、週2~3回1.56(1.25-1.98)、週1回1.37(1.05-1.78)、月1~3回1.62(1.28-2.06)であった。一方、女性の1人での実施で週4回以上1.33(1.14-1.55)、仲間との実施で週4回以上2.38(1.82-3.11)、週2~3回1.52(1.23-1.88)、週1回1.51(1.21-1.88)であった。

【結論】運動を1人で実施する場合も仲間と実施する場合も頻度の高さが主観的健康感の良さに関連したが、仲間との場合はより低い頻度でも主観的健康感が良好であった。運動は「仲間と行うか」によって健康への効果が異なる可能性がある。

P2-41.

重症筋無力症患者におけるB細胞活性化因子を標的とした治療の可能性に関する検討

(東京薬科大学：臨床薬理学教室)

○田中 祥子、河合奈々江、黒江 里歌

落合有美香、恩田 健二、杉山健太郎

平野 俊彦

(東京医科大学病院：神経内科)

増田 眞之、井上 文、伊藤 傑

齋藤 智子、相澤 仁志

(東京医科大学病院：薬剤部)

明石 貴雄

【背景・目的】重症筋無力症(MG)は、神経筋接合部のシナプス後膜に存在するアセチルコリン受容体に対する自己抗体により神経筋伝達が障害され、全身の筋力低下を呈する自己免疫疾患である。治療には、副腎皮質ステロイド薬やカルシニューリン阻害剤などT細胞を標的とした薬物が用いられる。B細胞活性化因子(B cell activating factor belonging to